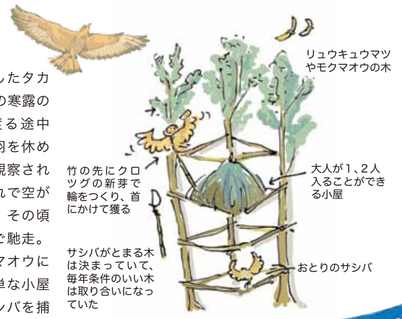
伊良部島とサシバ

夏の間、本州で子育てをした夕カ『サシバ』が、10月初めの寒露の頃、東南アジア方面に渡る途中に、伊良部島で一夜だけ羽を休めます。毎年２万羽ほどが観察されますが、昔はサシバの群れで空が真っ黒になるほどでした。その頃のサシバは、年に一度のご馳走。リュウキュウマツやモクマオウに「ツギャ」と呼ばれる簡単な小屋をつくり、降りてくるサシバを捕まえました。現在、サシバは保護鳥として、捕まえることも食べることも禁止されています。



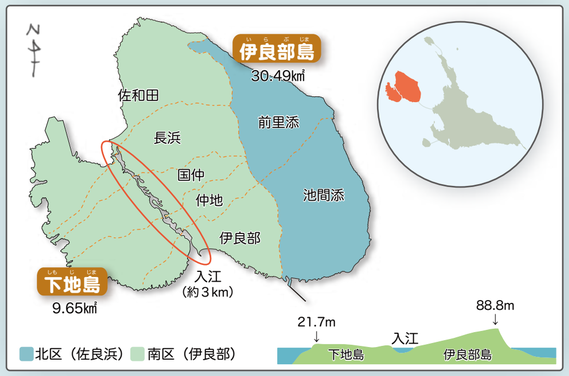
伊良部島のサシバを探せ！

伊良部島のシンボル、サシバは、牧山展望台、フナウサギバナタほか、平成の森公園のすべり台、たいこばしの欄干などに使われています。

伊良部の時の音

午前10時、正午、午後３時には安里屋ユンタのメロディが流れ、畑仕事の休憩やお昼の時間を告げ、午後６時には夕焼け小焼けが帰宅の時間を知らせます。

- スーパー・コンビニ
- 公共宿泊施設
- 津波避難施設



伊良部地区は、伊良部島と下地島で成り立っています。ふたつの島はとても平坦で、幅の狭い入り江で隔てられ、上から見ると、蝶が羽を広げたような形をしています。
宮古島市の人口約55,000人のうち、およそ5,300人が伊良部島で暮らしています。
2015年１月31日、40年にわたる島民の悲願であった伊良部大橋が完成し、伊良部島と宮古島がつながりました。

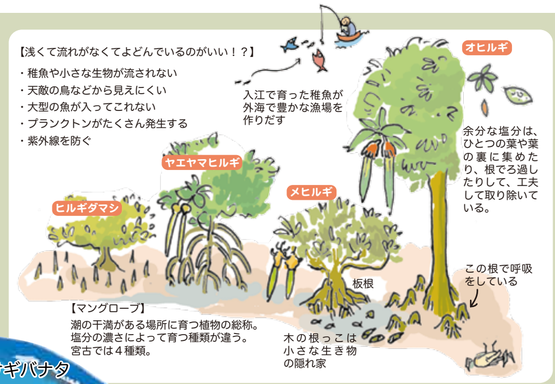
産業も文化も大きく違う北と南

伊良部島は大きく北区(佐良浜)と南区(伊良部・仲地、国仲、佐和田・長浜)に分かれます。昔から北区では漁業が栄え、南区では地下水が豊かなことから農業が盛んに営まれてきました。北区では婚姻すると、男性が女性の家に通う風習がありましたが、それも、漁で長い間男たちが家を離れるという生活習慣に沿ったものでした。暮らしの中では、北の魚と南の野菜の物々交換も活発におこなわれていました。

魚や野菜を売り歩くのは女性の仕事だった

豊かな生物相をもつ「入り江」

伊良部島と下地島の間には、複雑に入り組んだ入り江があります。入り江は海水と湧き水が混じる汽水域で、マングローブの森が広がり、多種多様な生き物たちの棲み処になっています。
特に、ガザミと呼ばれるマングローブ蟹は、伊良部島の新たな特産品として注目を浴びています。



下地島巨岩(帯岩)

過去の大津波で打ち上げられた巨岩。かつては無数にあったが、ほとんどが砕かれ、空港の建設工事に使われた

カヤッファ（中之島ビーチ）

家の屋根をふく茅(カヤッファ)がたくさん生えていたことが名前の由来

岩礁に育つ植物たち

旧暦と行事

行事や祭祀は、旧暦に従っておこなわれています。佐良浜の旧正月は漁船に大漁旗を掲げ、盛大にお祝いをします。旧暦１月16日はあの世の正月。
家族や親戚が集まり、ご馳走をこしらえ、お墓詣りをします。

牧山に祀られる英雄たち

鉄の農具と農法を伝えた守り神 あからともかね

伊良部でもっとも古い元島は、佐和田の嵩平山と牧山周辺とされます。1350年ごろ、牧山には、宮古本島の久貝村から人々が移住し、集落を作りました。1380年ごろ、久米島から兄弟がやってきます。兄は八重山へ、弟はこの地にとどまり、鉄の農具と農法を伝えました。弟は死後、「あからともかね」として、牧山の比屋地（ピャーズ）御嶽に祀られています。

大鰻を退治した豊見氏親

1400年半ば、平良と伊良部の間の海に大鰻(サメ)が現れ、船を転覆させ、人の命を奪っていました。それを知った伊良部島の勇者、豊見氏親は、ひとり小舟を出し、鰻退治に向かいますが、舟ごと飲み込まれてしまいます。しかし、豊見氏親は鰻のお腹の中から、刀で何度も切り付け、鰻はとうとう絶命しました。比屋地御嶽には、豊見氏親も脇神として祀られています。

八重山征伐に従軍した絶世の美女 伊安とのおも

豊見氏親の子孫といわれる伊安とのおもは、美しく霊力の強いノロとして宮古全土にその名が知れ渡っていました。1500年代はじめ、宮古を統一した仲宗根豊見親は、各地から有力なノロたちを集め、八重山のオヤケアカハチや与那国の鬼虎討伐の際の先陣としましたが、伊安とのおもも、そのひとりでした。当時の戦いは、まず美しいノロたちが呪詛合戦をし、その後で武将たちが闘うというものでした。

※ノロ：神女。宮古島ではツカサと呼ばれる。神々と交信し、祭祀を司り、御嶽を守る役割をする女性。

島にはカンダガイ(霊感が強い)人が多いという。神と霊と人の距離が近いせいかもしれない。マズムヌ(魔物)を見たという話しも珍しくはない。

欄干には伊良部の子どもたちが描いた絵がタイルパネルが飾られている

さんごしま 3,540m

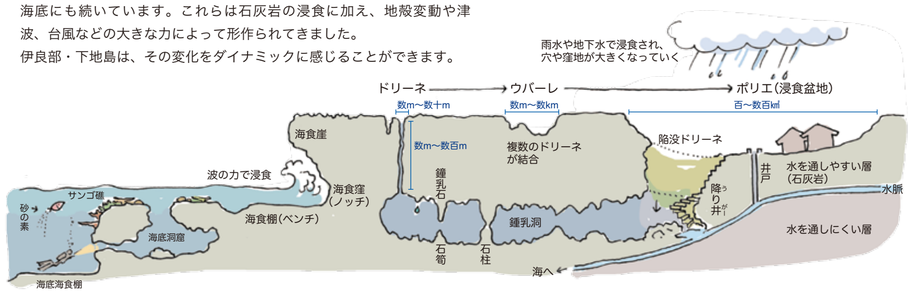
通り池ができたわけ

宮古島は、長い歴史の中で、何度も大津波の被害を受けたといわれます。佐和田の浜に点在する岩々や、帯岩と呼ばれる巨岩は、津波のすさまじさを物語ります。
1771年に宮古・八重山諸島へ押し寄せた明和の大津波は、宮古諸島で2,461名の死者を出したと記されており、通り池に伝わるヨナタマ伝説は、その恐ろしさを思い知った人々によって語り伝えられてきました。

通り池ができるまで 参考：宮古島市総合博物館紀要 第 18 号 安谷屋昭 (2014)

石灰岩が生んだジオパーク？！

下地島には、通り池のような陥没ドリーネがいくつもあり、その地形が海底にも続いています。これらは石灰岩の浸食に加え、地殻変動や津波、台風などの大きな力によって形作られてきました。
伊良部・下地島は、その変化をダイナミックに感じることができます。



伊良部大橋

無料で渡れる日本一長い橋です。伊良部大橋の橋ができるまで、定期船が伊良部島と宮古島をつないでいましたが、悪天候による欠航や、病気、出産といった緊急時などは、離島の不便さや不安がありました。しかし同時に、通学通勤の大切な足であった定期船には、島人ひとりひとりの想い出やドラマがありました。

島時間を楽しもう。遅い車がいるのなら、それは「ゆっくり走れ」というサイン。のんびり流れる景色に新しい発見があるかもしれない。

南区（伊良部）

盛んだった塩づくり

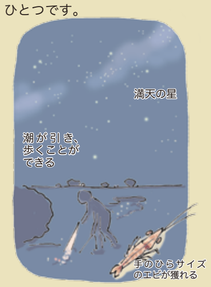
佐和田の浜近くでは、入江の構造を利用した塩づくりが盛んにおこなわれていました。塩は味噌づくりにも欠かせず、味噌仕込みの季節になると城辺方面まで売りに出向きました。その後、一時は衰退したものの、戦後、需要が急増しかつてないほどの活況を見せ、地域の経済を助けました。また、製塩の薪を確保するために、造林も盛んにおこなわれました。伊良部島や下地島に広がるリュウキュウマツやモクマオウの森は、サシバが羽を休める場所にもなっています。

伊良部の島酒

宮古島全域には現在６つの泡盛工場があり、そのうちの２軒が伊良部島の佐和田と仲地にあります。祭りごとや行事には、地元の泡盛を２本携えるのが島の流儀です。

佐和田・長浜地区

遠浅の湾は、エビや貝、蟹などさまざまな生き物がすみ、豊かな漁場として暮らしを支えてきました。特に、冬の大潮の夜に行くイザリ漁は、今も楽しみのひとつです。



祭

祭祀の前の『ンツ』づくり

祭祀が近づくと、各集落では神に捧げる酒（ンツ）づくりが始まります。ンツは、炊いたモチ米に麦麹を加え一晩発酵させたもの。かつては、口で噛んで発酵させる口噛み酒が造られていました。できたンツは甕に入れられ、御嶽や祭場に運ばれます。

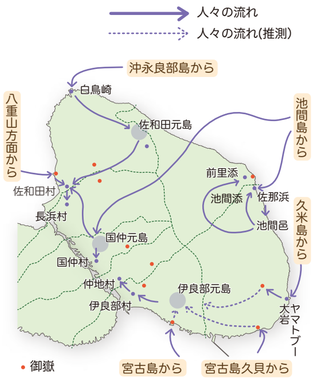
豊年を願うユークイ

南区５地区では、豊年祭のユークイが盛大です。日頃は入れない各地区の御嶽に、集落の人々が集まり、唄い踊って祝います。豊(ゆう)を乞うという意味の掛け声が、「ユーンテル、ユーンテル」と夜遅くまで響きます。

伊良部の人々は どこから来た？

古代、石器時代のころから、伊良部島には人が住んでいました。海岸の洞窟で血族集団がともに暮らしていたと考えられています。1300年代以降になると、宮古島本島や八重山、久米島、沖永良部島などからやってきた人々が加わり、伊良部島の各地に集落ができました。その後、集落は水の豊かな場所を求めて移動し、1700年代になると、佐良浜に池間島の分村ができました。そのルーツの違いから、今でも、各地域の言葉には違いがあります。

佐良浜では毛虫を〝うきゃん〟というけど、伊良部では〝すぎん〟っていうさ。すぎんは佐良浜では話のこと。毛虫がなんで話になるかと口論したこともあるさ〜。



参考：正保の国絵図(1646)/ 伊良部村史(1978)

伊良部の人々は 何を食べていた？

※国仲地区の呼び方(地域によって異なります)

主な農作物は、粟、麦、豆と芋。豆は豆腐や味噌にも。味噌づくりは女たちが共同で仕込み、麹を上手にたてられることは女性たちの誇りでした。主食の芋は乾燥させて非常食に、芋のつるや葉っぱは汁の実に。
佐良浜地区ではかつお工場が立ち並び、かつお節やなまり節が盛んにつくられました。南区では、豚や山羊を飼い、祝い事など、特別な行事には食卓を飾りました。

北区（佐良浜）

100年の歴史をもつ カツオ一本釣り漁

かつて、宮古島の漁師たちにとってカツオは神の遣いとされていました。佐良浜でカツオ漁が始まったのは明治42年。大正時代には隆盛を極め、宮古島の経済を支えます。昭和に入ると南方漁業が盛んになり、漁師たちは１年のほとんどをソロモンやパラオなど南洋で過ごしました。父と子が１年船に乗ると家が建つといわれ、中学を卒業すると、大勢の男の子たちが南方へ向かいました。
現在も４隻のカツオ船が操業し、沖縄県のカツオ漁獲量の約８割が佐良浜漁港に水揚げされます。

パヤオ(浮き漁礁)漁発祥の地

パヤオはフィリピンの言葉で筏を意味します。現在設置されている10数基のパヤオは、伊良部漁協の手作りです。

佐良浜だけに残る 伝統のアギヤー漁

深く潜水し、グルクンの群れを追い込む「アギヤー」漁は、糸満から伝わった伝統漁法で今では佐良浜にのみ残ります。県魚グルクンの約５割が、佐良浜が水揚げしています。アギヤー漁師たちや、アギヤーの技術を使ったエサ獲り専門の漁師たちが獲るグルクンの稚魚は、一本釣りに欠かせない生き餌になります。

祭

佐良浜最大の祭り、『ミャークヅツ』

旧暦の八月または九月に、佐良浜では４日間にわたってミャークヅツが盛大におこなわれます。ミャークヅツとは、ある年齢に達した男性が、ムトゥと呼ばれる祭祀集団の一員として認められる儀式で、元島の池間島や、同じく分村した西原地区でもおこなわれています。

御嶽を守り祭祀を司る ツカサ

御嶽を守り祭祀を司る女性をツカサといい、神と人との橋渡しとして、御嶽と祭祀にまつわるさまざまな役目を果たします。集落によって違いはありますが、多くは集落に生まれて暮らす女性たちの中から、神様の前で選ばれます。

国仲地区

南区の中心地

国仲は、南区の商業や行政、教育の中心地として発展してきました。今でも郵便局や民宿、お土産物や飲食店、小中学校などが集まっています。

５つの地区をつなぐ五ケ里道

人口が増え、新しい村がつくられたものの、集落と集落の間には狭い道しかありませんでした。
大正４年、南区の５つの集落を結ぶ「五ケ里道」が敷設され、馬車で荷物を運ぶこともできるようになりました。

昭和30年代半ばごろまで運搬や農耕には馬が活躍した

※御嶽は集落の大事な聖域です。祭祀以外は立ち入りや植物の伐採などは禁じられています。

キビ倒しと製糖工場

冬は「キビ倒し」(サトウキビの収穫)で農家はとても忙しくなります。家族や仲間たちで一本一本手刈りをする従来の方法と、ハーベスターと呼ばれる大型機械で一気に収穫する方法があります。収穫したキビはダンプカーに積まれ、製糖工場へ向かいます。キビを山積みしたダンプカーが何台も連なり、道を走る様子は壮観です。少し前まで、

キビは、子どもたちのおやつでした。歯で皮をむいて茎をかみ、甘いジュースを吸います。キビ倒しと同時に、製糖工場も稼働開始し、工場の煙突から周囲一帯に甘い独特の匂いが広がります。

仲地・伊良部地区

ダキフガーと ヤスルギー御嶽

五ケ里道の六差路に面してダキフガーがあります。ダンチク(イネ科の植物)の群生の中に湧水があったことが名前の由来とされます。直径２ｍを超える大きな井戸は、この地域の地下水の豊かさを物語ります。水に恵まれた南区では、その後、各家に井戸が掘られるようになりました。ダキフガーの隣にあるヤスルギーと呼ばれるガジュマルの巨木は、かつてはその樹幹が今の数倍も大きく広がり、人々に大きな木陰を提供していました。

散策コースは住宅街の中や民家に隣接しています。お互いが気持ち良く過ごせますよう、ご配慮をお願い致します。